「これでいいのかの」の問いかけ

新村猛先生のことをレポートしたこともあり、『緑の樹 新村猛追想』1995 年を久しぶりに手にとった。その中で、岩切信さんの表題の追悼文に目がとまった。

私にとっても、すこしは関わりがあることなので、要約して紹介したい。

私たちが新村先生の名古屋市名東区のご自宅に押しかけたのは 1974 年の早春の頃だった。私はもと東京新聞の社会部記者だったのだが、中日新聞が東京新聞との合併に乗り出した 63 年に労組の委員長となり、65 年春闘のストライキを口実に他の組合役員 2 人とともに解雇され闘争中であった。長い年月がかかった裁判所や労働委員会の訴訟や審問で、ようやく解雇撤回・現職復帰の判決や命令をかちとったものの、中日新聞の経営者は控訴や再審を繰り返して争議を解決策しようとはしなかった。

私たちは、名古屋で同様の闘争をつづけている中部日本放送や名古屋放送などの仲間と共同闘争を強めることとし、73 年から闘争本部を名古屋に設置し、中日新聞の経営者に「判決・命令を守れ」の大運動に乗り出していた。しかし名古屋城内、中日の門は固く、正直なところ攻めあぐんでいた。そこで新村先生に助言をいただくためにご自宅まで押しかけたのだった。

1975 年　東京大手町産経ホール
「東京新聞争議支援集会」で

書斎の大きな机には書類や手紙などが山積みされており、その向こうの椅子に腰を下ろした先生は、私たちの話を真剣に聞いておられたが、やがて名古屋の歴史・風土や政治、経済、社会、文化、思想の状況について静かに話をされた。また愛知県知事選挙などの経験から、中日新聞の報道が財界とこれに癒着した政界に肩入れして多くの県民市民の批判や不満がつよまっていることも指摘された。つまり私たちのたたかいが、中日新聞の内容をよくすること、読者の要求とどのような関係があるのか、ということをよく考えるように、と示唆されたのだった。

私たちは先生に紹介をいただいた方々を訪問して、運動に対する意見を聞いた。運動のスローガンも、「中日新聞話はこれでいいのか。紙面に真実を、職場に民主主義を」に改めて、市民の中に入っていった。これが全国でも例をみない「東海地区のマスコミを考える学者・文化人の会」発足のきっかけだった。

「今日、マスコミは、市民の世論形成に圧倒的な影響をもっています。したがってマスコミが自由と民主主義を貫くことは、市民に対する責務であると考えます。マスコミ内部におけるこのような民主主義に逆行する事態の進行は真に自由なジャーナリズムとしての発展と、個性ある地域文化の向上を妨げるものとなっています」との呼びかけ

は、340 人もの賛同者を得て、会は 74 年の 9 月に発足した。

中日新聞の首脳部がこの学者・文化人の会との会談に応じたのは秋も深い 11 月 15 日だった。新村先生は、会長、社長、編集幹部らを前にして、新聞の社会的責任を質し、地元紙の使命を説き、東京新聞争議解決を提言されたことが、会の機関紙「マスコミを考える」第 2 号に掲載されている。こうして新聞界の中でも最も深刻とされた 10 年にも及ぶ東京新聞争議の解決の道が開かれたのだった。この当時のある会合で、先生がいわれた言葉が耳に残っている。

「これでいいのか、と問われているのは中日新聞だけだろうか。岩切信も、新村猛もここにいるみなさんも、ほんとうにこれでいいのか」

東京新聞を定年退職したあと、非力ながらもジャーナリストとして、また日本ジャーナリスト会議（ＪＣＪ）の会員として活動を続けているのは、先生の「これでいいのか」の言葉にはげまされているからだ、と思う。

かつて「東海地区のマスコミを考える学者・文化人の会」の事務局を何年かにわたり務めたことがある。レポートにも書いたように、「平和を語る八月名古屋集会」を企画し運営してきた。岩切さんの追悼文により、当時のことを思い起こした。

今日の中日新聞・東京新聞の活躍ぶり思うと、東京新聞争議とその解決に向けた新村先生らの活動の「重み」をあらためて感じる。

（2015 年 9 月 20 日）